

違いを力に

発達障害をめぐる現場から

発達障害の一つ、アスペルガー症候群の土屋健さん(16)「仮名」は、中学3年の夏から不登校になった。「空気が読めず、いじめに遭った」ためだ。進学の際「コミュニケーション能力を身に付けたい」と願って入学したが、大阪YMCA(大阪市西区)の国際専門学校高等課程「表現・コミユニケーション学科(表コミ)」だった。

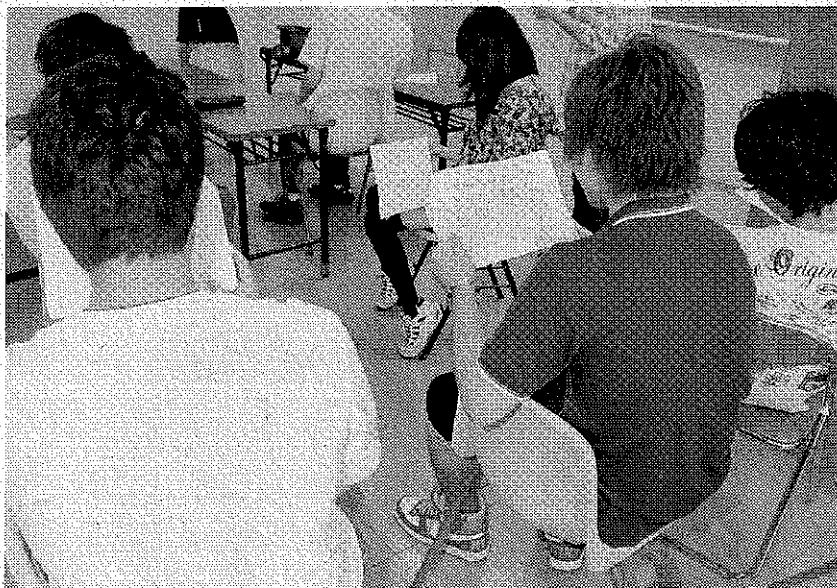
■役になり切る
「(表)まじまな理由で不登校になった生徒を受け入れる表コミでは、高校卒業資格に必要な教育課程に加え、特別支援教育を重視。卒業後の将来を見据え、人とかかわる力を培う授業が柱の一つで、最終的に演劇に取り組む。
3年は、9月にもなると卒業公演に向けてせりふ練

習の真っ最中。「べだべだ言つな。乱暴な口調だが、心根のやさしい男性を演じる生徒(20)は「役に入り込めるのが楽しい」とほほ笑む。

鍛治田千文学科長は「役になり切ることで表現力が広がる。演劇終了後、集団としての力は向上し、高揚感と達成感でいっぱいになり、それぞれの自信につながる」と効果を説明する。
2年の土屋さんは、演劇の授業で台本を担当。「演劇に携わる中でみんなと仲良くなっている」と言う。
■イラストを管理
「普段の生活の中でイラスト

第2部 教育の形

(3)



卒業公演に向けてせりふの練習に取り組む生徒たち

イラストした体験を書き出してみよう」。中学生中心の計4人のクラスで、自分の気持ちと向き合い、表現する課題が出された。
大阪YMCAは同所に、幼児から中学生までの発達障害児を対象に週一や月一のコースがある「サポートクラス」も開設している。

言語聴覚士の加藤義弘主任講師が出した課題に、子どもたちは「組み体操できないのが嫌だった」「イラストしたことなくって」「イラストしない」など、それぞれの力に応じて回答。
加藤主任講師は、より具体的に説明できるよう質問や具体例を加え、自己分析を促す。さらに「イラスト」への向き合い方を考えさせてストレスのコントロールを学ばせる。

同クラスの授業はゲーム感覚を重視。楽しさの中で、言葉の使い方や自己理解を深めさせるのが狙いだ。
広域から多彩な子どもが集まる点を生かし、同じような課題と目標を持った子どもたちで少人数のグループを編成し、きめ細かい指導と社会性の向上につなげているという。

■自分を解放
表コミとサポートクラス

背景には、「暴言は許さない」といったルールの徹底や達成感を重視した授業運び、それを可能にする人員体制などがある。
表コミでは、20-30人規模の1クラスに担任は2-3人。1教科に最大4人程度のボランティアを配置し、問題の早期発見と長期的な支援につなげる。昨年度は、3年計23人全員が高卒資格を取得して卒業した。

将来見据え自信つける 演劇通して 表現力向上

鍛治田千文学科長は「不登校の子どもたちは、いじめられない、笑われたいと思っただけで自分自身を解放し始める」と強調。「ここで生きる力を身に付けてほしい」と願い、試行錯誤を続ける。